

受け入れ、祈り・供養・法要、心のケア、宗教者の救援活動に
関するマスコミ記事。

宗教者が被災地への物資輸送から火葬場での読経奉仕まで
様々な活動を展開している。被災者の受け入れをしている寺社
教会宗教施設もある。地域の文化・つながりを尊重しつつ、現
地の宗教者が地域を立て直すのを後ろから支えるという形の支
援も大切であろう。

日本人の多くは自分は無宗教と思っているが、先祖に対する
感謝の念や神仏や世間に対する「おかげ様」という思いは生き
ている。この「無自覚の宗教性」も支援の輪が広がっている背
景にあらう。

一方で、公共施設の中に僧侶が入っていけない、弔うことが
できないといったことも起きた。このような現実の厳しさを僧
侶は痛切に感じている。宗教者は日常的にどれほど社会に関わ
ってきたのか。

報告者は、「心のケア」ではなく「丸ごとのケア」が必要だ
と主張している。地域のつながりを奪われ、家族を無くし、縁
を失った人たちが、これから生きていく、その生を丸ごとケア
する。未曾有の大災害に宗教者も社会も「新たな縁」「取り組
み」を模索している。研究者もその関わりが問われている。

宗教者の活動とソーシャルメディア

榎本香織

東日本大震災時、Twitter や Facebook 等の「ソーシャル
メディア」と呼ばれる媒体が多くの情報収集や提供、共有に大
きく貢献した。本発表は、災害時における宗教者のソーシャル
メディアを用いた活動を俯瞰し、また今後どのような活動が可
能かを考察する。

「ソーシャルメディア」という語は、二〇〇六年頃よりアメ
リカで登場し始め、複数のSNSが興隆と衰退を交差させる中
で定着した。ソーシャルメディアは、オンライン空間で「リア
ル」な体験（経済活動を含んだ擬似生活、実名主義による交
流、ニュースのリアルタイムな拡散等）を可能にし、従来の
「ヴァーチャルリアル」の二項対立では捉えきれない空間を
創出している。ソーシャルメディアの媒体による線引きは難し
いが、本発表では日本で多く利用されている mixi や Twit
ter、そして利用率が伸び始めている Facebook における活動
状況を取り上げた。

mixi では震災後、コミュニティのカテゴリに「震災関連」
枠が追加されたが、その枠内で明らかに宗教者（特定の団体の
信者）によって作成されたコミュニティは、わずか四件ほどで
あった。これは既存の教団コミュニティ内で既に支援活動に関
するトピックが立ち上げられていた為で、多くの対話が行われ
ていた。しかし多くの mixi における活動は、特に物資支援関

連においては他のソーシャルメディアによる活動よりも芳しくないものであった。ある「震災関連」に登録されたキリスト教系コミュニティは、身元保証のために本名と所属教会を自己紹介欄で名乗ることを原則としたが、匿名文化の元に成長してきた mixi 内で本来の身分を開示する行動は多くの人々にとって躊躇させるものである。内面的対話の場としては有効的に活用されたが、物資支援等の現実的な行動に対しては、mixi 内の匿名性は弊害となっていたようである。

Twitter では、ハッシュタグ（#）を付ける事で用途に合わせて発言を集積することができる機能があるが、震災関連や震災に関する宗教者の情報関連等、目的別のハッシュタグを設定して情報の拡散と共有を促すと共に、自身のブログでもハッシュタグの宣伝をして認知度を広め、情報提供を呼びかける動きがあった。これは元々ブログなどの情報発信に慣れていた僧侶や牧師の中で散見された。宗教情報に関するハッシュタグを設定し、それを広めて定着化させること自体が、無数のツイッターの中から必要な情報を抽出する基礎づくりとなる点、集積され保存された発言群は、今後のための情報としてアーカイブス化に貢献するという点で、こうした行動も目的に合わせれば宗教活動として援用可能である。

Facebook は今回最も特徴的な役割を果たした。Facebook の災害時における教団コミュニティの可能性については、ロビンソンが「救援活動員同士の情報交換」「リアルタイムな報告とやり取りによるコミュニティ内の連帯の強化」を指摘しているが、これに加え同じ活動報告でも Twitter と Facebook で

は閲覧側の印象が異なる事から、コミュニティの可視化による外部からの活動理解も期待できると考えられる。

また、地元の最小単位の教会（寺院・神社等）での Facebook 内コミュニティ形成は、万一の非常時に際して即時に安否確認をしたり、遠隔地へ移った嘗ての同胞を迎えるような、寸断された地縁の回復の場となる可能性も確認された。

コミュニティの可視化は、教団内部の情報開示を意味するものではなく、活動をしている人の「顔」やそのコミュニティの「姿」が見えるという事である。そうしたものが見える事で、初めてネット上の宗教活動が単なる「情報」を超えたものとなり、宗教理解の一助にもなり得る事が Facebook 上の多くの宗教活動を観察して得た所感であった。

建学の精神と被災地支援

—— 宗教立大学のばあい ——

弓山達也

本報告の目的は、宗教立大学における円滑な被災地支援に、建学の精神や設立教団との連携がいかにかを検討することにある。そのため都内の宗教立大学一校（國學院・駒澤・上智・聖心女子・創価・大正・東洋英和女学院・武蔵野・明治学院・立教・立正）を対象に被災地支援の現状をウェブ上に公開されている情報と面談によって調査した。

ところで宗教立大学において、建学の精神と被災地支援との関係は二つのジレンマを抱えている。第一に宗教の社会貢献に